



# 再び「グローバルイングリッシュ宣言！」

—— DX 時代に問われる英語力の課題

今こそテストスコア至上主義の英語から脱却しよう。

株式会社 グローバルインパクト  
代表パートナー **船川淳志**

## 「社内公用語が英語」ブームは今

「グローバル人材育成 2.0」の課題について本誌で連載してきたが、避けて通れない問題が「英語」である。よって、今回は番外編として紙面の許す限り私見を述べたい。

冒頭のタイトルで、なぜ「再び」と入れたか。2010年に講談社から『英語が社内公用語になっても怖くない グローバルイングリッシュ宣言』を出版したと関係がある。

2010年といえば、ユニクロ、楽天が「英語を社内公用語に！」と宣言した年。10年前のその頃は「インバウンド」という単語がまだ普及する前であり、DX(デジタルトランスフォーメーション)も日本では語られていなかった、ということを考えれば両社は「先見の明」ありと言えよう。

そのインパクトもあって、「社内公用語が英語」ブームが起きた。NHK 総合テレビの「首都圏報道」が取り上げた際、私はコメントだけではなく企画段階のお手伝いもした。しかし、そのブームは定着することなく、相変わらず海外赴任者や海外プロジェクト担当向けの「つけやきば付焼刃的英語研修」と「とりあえず TOEIC 高得点を目指しましょう」という発想のままだ。

さらにやっかいなのは、英語がちょっとでき

ると調子に乗る「勘違い英語族」だ。周りに「英語苦手人」が多いと、大した実力もないのにごまかして転職先に潜り込む「英語煙幕ジョブホッパー」や「鳴り物入り社外役員」たちがちようりようぼつこ跳梁跋扈している。私は外資系企業にも深く関与してきたので、英語煙幕ジョブホッパーのトリックを暴いたことも1度や2度ではない。

つまり、英語の問題も「失われた30年」どころか、明治の教育制度のざんし残滓に加えて、戦後の国際化、そして進展してきたグローバル化によって顕在化したもう1つの「スキルギャップ」(本誌3月号参照)なのだ。

## 我々もネイティブスピーカー！

では、どうすればよいか？ まず、英語に対するコンプレックスの払拭と「英語煙幕」で実力をごまかす輩を見抜くけいがん慧眼育成が必要だ。それが「グローバルイングリッシュ」(以下 GE と記す)の概念である。

船川版 GE のレベルとは、

- レベル0：英語ぎらい、苦手、できれば避けたい
- レベル1：TOEIC の点数はある程度とれる。だけど使えない
- レベル2：通常の会話はある程度できる
- レベル3：プレゼンテーション、ファシリテーション、交渉がある程度できる